

沖

9

2019

俳句雑誌【おき】



笈の肩紐

能村 研三

確と嘯む石組船渠青あらし

蔵燕といふ自負あり巢立ちけり

梅雨の川鋼のごとき水奔る

軍艦のやうな靴来る巴里祭

活版印刷

先日、協会の仕事の関係で足立区にある印刷会社を訪ねた。協会の周年誌の出版をお願いしている会社で、自宅裏にある作業部屋に通され、そこには組版の何ページ分の木枠が所狭しと積み上げられていた。その脇には植字工が文選に使う活字棚があり、鉛の活字がたくさん揃えてあった。この組版は大きな地震があるとばらばらに崩れてしまう恐れがある他に火災にも弱く、保存しておくスペースも必要でこんなことなどが活版が衰退することに繋がったようだ。

活版印刷というものは版の凸部を押し付けることで紙にインクを盛り、力強い印刷技法で、凹み具合に変化をつけて紙の柔らかさを表現することも出来る魅力もあった。

来年創刊五十年となる「沖」は、創刊から数年間は東京八丁堀にある白橋印刷という印刷会社にお願していた。大手の会社を相手にするのが中心で俳句結社では加藤楸郎先生の「寒雷」が印刷されていた。

その後は北品川にある三協印刷で、俳句総合誌や俳句結社の何誌かがここで印刷されていた。時折、「秋」の編集を主宰自らが担当する

曾良ゆかりの諏訪の正願寺

笈負ふて遠眼差しの曾良涼し

送り梅雨曾良随縁の旅にあり

梅雨闇に曾良の背笈の紐二本

曾良が背の笈の肩紐夏羽織

曾良の「奥の細道随行日記」の発見者は登四郎の伯父山本安三郎

随行記観取の縁さみだるる

小刻みの湖波随に青き梅雨

石原八東先生にも出合うこともあった。ちょうど昭和が終る頃だったと思うが、これまで主流を担っていた活版印刷が衰退し始め、印刷会社からオフセット印刷への移行をお願いされた。活版印刷は、大変な労力がかかり、文字一つ一つの鉛活字を、書体・大きさを決め文字間・行間には活字より一段低い「込め物」を詰めてホワイトスペースを作り、一枚の版にして印刷機でプレスしてようやく完成するものである。この頃は私も「沖」の編集をやっていたので、逆さまあるいは横に転んだ字を校正時に直すこともあった。その後、印刷は地元市川の弘文社にお願いして現在に至っているが、今はもちろんキーボードを叩くだけで終わってしまう工程で、印刷の仕事が進むようになった。

「沖」の印刷の歴史を振り返るだけでも懐かしいものがある。これらの時代は紙離れが始まり電子媒体による結社誌の時代が来るのかもしれないが、やはり俳句雑誌は活字がしっかり組まれた雑誌の形式を何時までも守っていききたいものだ。

尺 蠖

森岡 正作

白南風や翼なきもの翼欲る
手配書と並んで待てる梅雨のバス
尺蠖の怠けてゐたる葉裏かな
一撃か自爆か真夜の黄金虫
葭簣洩るラジオの昼の歌謡曲
相応に齢重ぬる竹婦人
文通の昔ありけりパリー祭

帰省子に

夏休みになると帰省のシーズンだが、交通網が発達した現代では、帰省という意味合いが昔と随分変わった。登四郎先生の〈帰省子に自動改札となりし駅〉という句が、いみじくもその中間点のような気がする。以前は切符を買うにも、改札を通るにも顔馴染みの駅員に親しく声を掛けられたものである。また列車の四人掛けの席では、愛想の良い婆さんに冷凍蜜柑をもらい世間話に飽きなかった。今の新幹線では自動販売機で飲み物を買って乗れば、後は目的地まで無言のままである。

これも思い出であるが、学生の時の帰省で、「津軽」という夜行列車の寝台台車に乗った。私は向かい合わせの三段ベッドの上段で、あとの五人は何と女学生、座る隙間もない。これなら早く寝てしまおうと、ビールを二缶飲んだのが大間違い、案の定、夜中にトイレへ行くことの苦渋と決断が待っていた。そのじいつと耐えた時の冷や汗の感触は、今でも生々しい。

もう〈故郷は遠きにありて思ふもの〉〈ふるさとの訛りはなつかし停車場の〉の時代は、遠く甘い記憶だけとなった

能村登四郎の軌跡〔13〕

能村 研三

水よりもせせらぐ耶馬の鱗雲

『幻山水』昭47

大分耶馬溪の江溯雲庭さん、江溯溪亭さん父子は二代に渡って「沖」の大分支部長を務めていた方である。この句は昭和四十七年に耶馬溪を訪ねた時の句。雲庭さんは「馬酔木」時代から登四郎より添削指導を受けていた関係で「沖」の創刊時から参加、雲庭さんが校長を務める学校の校歌の作詞を手掛けている。江溯家は耶馬溪の山を幾つも持っている名家で、かつて私も登四郎の共をして泊めていたことがあるが、もてなしの宴に使われる食材の全て自給で賄われていた。耶馬溪の青少年旅行村に句碑が建立された。

二月田の水湧く場所は榛の下

『幻山水』昭48

いろいろな雑誌に掲載するため登四郎のポートレートを撮らなくてはならず、そのカメラマンは「沖」同人の門岡木偶子さんが引き受けてくれた。ある時私の車で市川市内でもまだ田園風景の残る大柏川の河畔へ撮影に行った。二月の田んぼは農作業にはまだ早く乾ききっていた。畦に立っている芽吹前の榛の木はまだ淋しくもあったが、その下からこんこんと清冽な水が湧いていて、春の近きを感じさせた。この句あたりから心象風景を脱してリアリズムを鮮明にする句風になりつつあった。

月射して凍滝さらに凍つる刻

『幻山水』昭48

「沖」の同人研修会で茨城県の袋田の凍滝を見に行った時の句。創刊間もない頃の同人は皆俳句に燃えていた。この吟行は今瀬剛一さんが企画したもので、少し遅れて着いた登四郎を案内しながら夜の凍滝を見に行き、月下の滝の凄絶な風景を充分に味わった。この時私はまだ同人になっていなかったが、この時の話を聞いて私も早く同人になりたいと思った。旅に出ることが多くなつた登四郎は「旅は日常から脱出して新しい珍しさに触れることである。」と言っている。

杉の間にひらく筈なる花火待つ

『幻山水』昭49

この頃登四郎は「見たものを自分の中で時間をかけて濾過し詩の言葉にする。イメージを重視する作風は一見虚構のように見えるがその母体にあるのは誠実な写生精神である」と述べている。この句は「ひらく筈なる」という予測の中で花火の美しさを捉えているのが眼目。まだこの時点では夜空に絢爛と開花する花火の豪華さは僅かも見えないが、その期待の先を「杉の間に」と明瞭に設定して虚構の世界が観念に陥ることを補充しているように思われる。



蒼茫集



あぶらの如し

辻美奈子

裏・表

宮内とし子

* 四万六千日アスファルトの継ぎ目
沼の面あぶらの如し蛇泳ぐ
腐草蚩となれよ反故にせし句のあまた
雨降るも止むも茅の輪のほひかな
紫陽花の紅に小さき鬼の住む
尖塔の原型として文字摺草

ゆらり 栗原公子

* 蝶の羽曳くは祭か蟻の列
仰ぎ見る神の手抜きのやうな虹
悔い少し薄れゆきたり二重虹
さりげなき一言重し心太
諸肩に矜持あらはに墓
夏の月赤しゆらりと小さき地震

名を記してより形代に裏・表
* 一村のみんな働く麦の秋
青梅雨の山迫りくる大糸線
コンピナート海に落せる夜涼の灯
かき氷舌に濁世の赤残し
白南風やアニマル柄といふファッション

蒲の花 吉田政江

* 鎧はずに生きたし蒲の花固し
若芝へスパイク跡の穴無数
油彩画の匂ふ図書館走り梅雨
何処を抜けどこを出て来し蓮見舟
街薄暑電光ニュースの色増えて
夕虹や豆腐屋の笛きこえ来る

他郷 千田百里

*住み古りし他郷や確と浮巢見て
木下闇鳥語のあらば木語はも
さてどこで話折らうか走馬灯
川風を浴ぶ四万六千日疲れ
クールビズ誰もが唯の人に見ゆ
半夏生膝を折らねば切れぬ爪

筋金入り 細川洋子

蓮池の木道そらをゆく心地
散蓮華ひとひら拾ふ若き母
狛犬の貌のつぺりと梅雨深し
*噴水の筋金入りの撓ひかな
今居るは大夕焼のどの辺り
木星を徳星と呼び星涼し

一枚の紙 林昭太郎

麦秋や赤子の四肢の深くびれ
思はざる嬰の握力合歡の花

キーボードに使はざるキー梅雨長し
*一枚の紙にも重さ八月来
研ぎ上げて刃の匂ひたつ真炎天
御巢鷹の山一塊の蟬しぐれ
みづなら 広渡敬雄

*修司忌や浮袋なき深海魚
片寄せの車三台鮎解禁
みづならの葉騒も夏至となりにけり
署の前を水打つてをり消防士
鬼灯市袖笠雨となりにけり
吊られたる鶏の真下を羽抜鶏
鮎 石川笙児

*鮎のことなら少年になる恩師
万緑を映して揺るぎなき湖面
縄文は女神の時代緑さす
滴りに濡るる螺髪や磨崖仏
青あらし城址に市立小学校
空濠の草生き生きと露涼し

潮鳴集



団子虫

小林陽子

白南風や娘船頭ぐいと舵
ラベンダーの沖ゆく星に届くまで
からす瓜咲く闇に静脈走ると
* 団子虫くるり明日から夏休み
晩夏光運河一本鋼めく

眠れぬ金魚

井原美鳥

芙美子忌や常の茶なれど少し濃く
浜をもと沖ゆく雲に雨柱
しろがねの萍に会ふ月あかり
* 眠らない街の眠れぬ金魚かな
スーパータかはし特売に手火花も

戦語らず

須賀ゆかり

* 戦語らず白玉を茹でてをり
リヤカーの幅の島道南風吹く
芭蕉来し村や泉の祀らるる
三伏の奇巖を突いて川下り
夏服の袖より入る今朝の風

スコール

森村江風

* 飛行機雲一筆走り梅雨明くる
滑降す炎熱揺るる滑走路
火炎樹へめらめら点火油照
スコールは継ぎ端なく街は白の黙

飛鷹選評



能村 研三

炎帝の御成りアスファルトの轍 仲里 貞義

どんな上手い句でもどこか手垢がついた表現を見るとがっかりするが、この句は自信を持って、類想類句がないと断言できる句である。炎帝は夏を司る神だが、炎帝を敬いつつも「御成り」とは面白い。私もかつて土木の仕事を生業としていた時期があるので、灼熱の太陽のもと、地面のアスファルトは熱に変形しやすいことはよく知っている。炎帝がお通りになることで舗装面のアスファルトに轍が出来てしまった。

辻井伸行木洩れ日の音滴らす 村上 葉子

その才能を認められ今や世界的に知られる盲目のピアニスト辻井伸行氏の奏でる曲を聞きながら、きらきらとこぼれ散るような音の響きを木洩れ日の音と聞き、山の滴りの雫がこぼれるようだと言いつつ、季語の「滴り」の本意とは違う使い方だが、感覚表現として引つ張っていく力を感じた。

多作多捨青柿にある自選かな 谷原 壮平

「多作多捨」とか「自選」といった俳句の実作者が経験する言葉を使った句で面白い。柿は梅雨どきに目立たない花を咲かせる、そのあと青い実をつける。次第に大きくなり、青柿と呼ばれるまでに成長するが、枝を撓らせるほど重くなると、激しい風雨の翌朝、幾つも落ちていくことがある。秋になって色づくまで成長する柿になるには、柿の木の世界でも自選力が必要のようである。

大鰻に瞬時の目打ち刃の走る 小形 博子

大きな鰻を裂くときに、目の下に目打ちとよばれる錐状の金具を打ち込んで、まな板に縫い付けるようにしてから包丁で捌く。「串打ち三年、板（割き）五年、火鉢（焼き）一生」と言われるように、職人は腕を磨かなければならない。

降れば憂し降らねば欲しや五月雨 佐川三枝子

今年の梅雨は全国的に梅雨入りも遅かったが、梅雨が明けるのも遅かった。人間は誰もが贅沢な望みを出すものの、天気ばかりは、その望み通りにはいかない。降らなければ田畑には深刻な問題で、降り過ぎればあちらこちらに大水の被害をもたらす。中々自然のころ合いといったものは難しい。

瑠璃色の地球紫陽花から雫 永尾 春己

松田聖子の歌で「瑠璃色の地球」という歌があった。皆に唄いつがれ、合唱曲にもなった歌である。作者もこの歌のイメージが心のどこかにあったのではないか。瑠璃色の地球というのも宇宙から遙か地球を望めばこのように見えるのだろう。紫陽花から雨雫が落ちる微小な景は、地球規模から見ると米粒より小さいものだが、その対比が面白い。

沖作品



能村研三選

走り茶や知覧特攻隊の遺書

番傘の気分で日傘男子かな

最終の水着 審査や立葵

* 炎帝の御成りアスファルトの轍

地軸角ゆらぎ白夜の国となる

* 辻井伸行木洩れ日の音滴らす

身の内の野性ふつつ青葉闇

梅雨の蝶シテのごとくに現れぬ

紫陽花の待ちをる雨となりけり

風薫る昭和の味のライスカレシ

* 多作多捨青柿にある自選かな

頭から魚呑む鳥や麦の秋

玉葱を吊るせば生るるドレミファド

まひまひの避難溜りや日照雨過ぐ

大蚯蚓上五に切れを入れにけり

埼玉

仲里 貞義

千葉

村上 葉子

谷原 壮平

* 大鰻に瞬時の目打ち刃の走る

草刈るや夕日の親し岬ぐらし

亡き父の部屋の主なり夏帽子

海霧深し糶場の隅の空生簀

時差ばけの暈の我家遠蛙

父の日や父詠むことの少なくて

* 降れば憂し降らねば欲しや五月雨

膝元を離れぬ猫や梅雨寒し

休耕地 藜 百本競ひ立つ

東照宮石垣の目の苔の花

顔を打つ風に湿りや行々子

瑠璃色の地球紫陽花から雫

朝風のしじま漁船の白き水脈

青田風棚田に鳶を吹き上げし

幼子の昼寝絵本を抱きしまま

小形 博子

福島

佐川三枝子

福岡

永尾 春己